2019 年度　事業報告書

建築プロンティアネット

[事業項目]

① 被災建物の相談対応・・・窓口設置や戸別訪問による、建物の復旧作業へのアドバイス

② 木もくひろば（木工ワークショップ）・・・被災者と一緒に行う家具づくり

③ 今後の災害に向けた取り組み・・・避難所間仕切りシステムや防災についての勉強

［事業実施概要］

① 被災建物の相談対応

武雄市の水害後に発足した民間のボランティアセンター【おもやいボランティアセンター】にて、被災した建物についての相談への対応。

個別に訪問して、被災状況のヒアリング、浸水部分の壁やの床下の状況確認（断熱材等の状況、木材の水分量の確認や床下換気状況、カビの有無、構造体の確認…）をし、被災部分の撤去や床下消毒に入るにあたっての注意点の確認や、復旧工事へのアドバイスを行い、住環境改善に向けて活動した。

また、応急修理制度の内容周知のためのチラシ作成や、書類作成・申請手続きのサポートを行った。

［相談活動の様子］

↑訪問し、住民の方と状況の確認

↑イベントにて青空相談窓口設置

←ボランティアの方が作業に入る前に
必要作業や注意点等を確認。

② 木もくひろば（木工ワークショップ）

おもやいボランティアセンターで開催の「おもフェス」にて窓口の設置、事前にイベントのチラシ（別紙添付）、ボランティアセンターや建築プロンティアネットの FB ページで告知を行った。※当初は当該助成事業未申請のため、チラシに記載なし

希望者には、訪問や相談窓口等で対応。まずは棚等の使用目的やサイズや段数について希望事項のヒアリングを行い、建築士スタッフが図面を作成。木材の加工寸法までをメモ。その後木材をカットし、被災者の方とともに木工スタッフが組み立てを行う。（木工スタッフは、大工・家具職人・建具職人等）
参加者とともに行う組み立ての所要時間は１時間から１時間半程度。

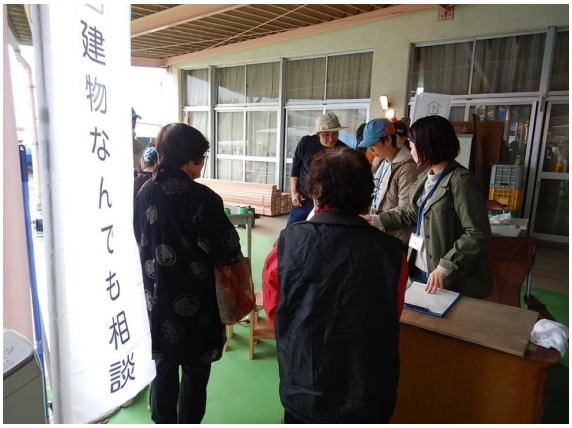
ワークショップをしながらいろんな話をしていると、被災時の状況や現在の住まいの状態なども聞け、木工だけでなく暮らしの中で他に困っていることの掘り起こしにもつながった。

[木もくひろば（木工ワークショップ）開催日時・参加人数]

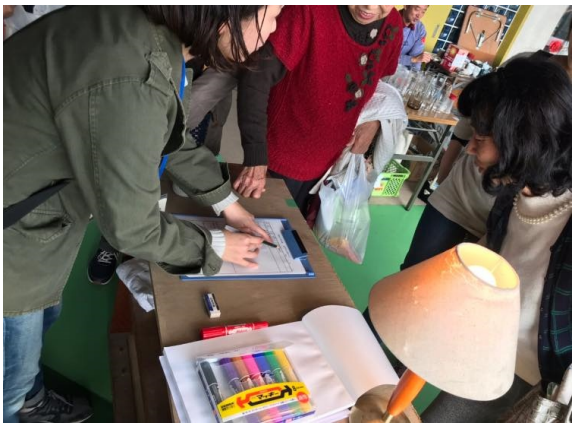
第１回目　2019 年 11 月 24 日
　参加者：9 組 13 名　スタッフ：8 名
第２回目　2019 年 12 月 1 日
　参加者：６組 6 名　スタッフ：7 名
第３回目　2019 年 12 月 15 日
　参加者：５組５名　スタッフ：4 名
第４回目　2020 年 1 月 19 日
　参加者：5 組 7 名　スタッフ：8 名（うち学生３）
第 5 回目　2020 年 2 月 9 日
　参加者：４組 5 名　スタッフ：4 名
番外編　こども木もくひろば　2020 年 2 月 16 日
　参加者：15 組　スタッフ：8 名（うち学生３）
第６回目　2020 年 2 月 23 日
　参加者：4 組 4 名　スタッフ：4 名
第 7 回目　2020 年 3 月 29 日
　参加者：4 組 4 名　スタッフ：5 名

参加者計：３７組４４名（※こども木もくひろばを除く）

[木もくひろば開催の様子]



↑受付/ヒアリング窓口



↑イメージや希望を聞き取り、図面おこし

↑ワークショップの様子（全体）

↑大工の指導のもと、電動工具にも挑戦

↑完成した棚と参加者（第１回時）

↑サポートスタッフ

③ 今後の災害に向けた取り組み～避難所間仕切りシステム活用へ

災害発生後、避難所での生活は、プライバシーの確保が困難なことが多い。
各地の避難所では、紙管による間仕切りシステムが活用されているケースもよく見かけ、今回の佐賀の豪雨被災地のうち、大町町の避難所にもキットの提供が行われていた。
しかし各避難所を訪ねても活用されておらず、腰ほどの高さのダンボール間仕切りが使用されていた。
避難所を運営される方に話を聞くと、「一気に避難者が押し寄せ、後日このキットが届いたが、他の支援物資等を搬入する手間に追われてどんどん奥へ押し込まれていった」「組み立てたりすることを考える余裕がない」「顔見知りばかりが避難されているので、顔が見えるほうが安心される」などの声があった。

そこで、まずは間仕切りの必要性や組み立て手順等の理解を広めることが必要と思い、避難所が閉鎖され不要となった間仕切りシステムのキットを、ボランタリー・アーキテクツ・ネットワーク（VAN）より提供していただき、おもやいボランティアセンターで組み立てワークショップを開催した。
講師には、熊本地震発生以降、各地の避難所で間仕切りシステムの設置を行ってきた矢橋徹氏を迎え、武雄市役所職員の方や、佐賀県生涯学習センターからの参加もあった。
その後もおもやいボランティアセンターで設置展示や、江北町の防災イベントでも設置展示を行い、実際に体験の場を提供している。

現在武雄市では災害発生時の間仕切りシステムの供給のために、VAN 事務所との協定を結ぶような動きがとられている。

[事業での気づきと今後の展望]

災害発生後、被災した住宅を見て回ると、「もう古い家やけん、無理よね」「先も短いし手直ししても一緒・・」など、住まいに対する悲観の声が多く聞かれた。
状況を確認すると、確かに、水害以前から生じていたであろう問題や、簡単な修理だけでは解決しないトラブルも見られた。
「長く住み慣れた家を、災害によって諦めるのではなく、むしろ、これまで以上に快適な暮らしができるようにするためには、どうしたらいいか。」おもやいボランティアセンターのスタッフや、他県からも駆けつけてくださったたくさんのボランティアの方々も同じ気持ちで被災した建物に接してこられたと思う。その上で、安全に、これからも長く住み続けるにはどうしたらいいかを考えながら、建築士としてアドバイスを行った。

また、大工や建築士など、建築に関わる人間も佐賀県内でこのような水害をあまり経験したことがなく、どう対応すればいいかを学ぶ機会でもあった。これからの災害だけでなく、住まいづくりそのものに反映させていかなければいけない経験だと思う。

木もくひろばには、初回から予想を上回る反響があり、サポートスタッフのほとんどがワークショップでのものづくりや指導が初めての経験で、皆戸惑いはありながらも、ひとりひとりに対応した棚づくりワークショップが開催できた。
「大工さんが来て床の工事はしてくれたけど、家の中、なーんも家具がない。」
「唯一残った食器棚の上の段を玄関に置いて下足入れにしていた。」
「本も処分したけどまた新しい本を並べたいから本棚が欲しい。」
「3 か月ぶりに棚に靴を置ける！」
「食器を置く場所がなくて困っていた。」

作業をしながらいろいろな話をしていくと、水害以降、不便な暮らしをしている方がまだまだいらっしゃることに改めて気づかされ、他に何ができるかを探る時間でもあった。

女性の参加者が多く、木工作業や、電動工具の使用が初めての参加者がほとんどで「私にできることあるやろかー」と不安半分ではじめられたが、サポートスタッフが落ち着いて指導をしてくれたおかげで、明るく和やかな雰囲気となり楽しんでもらえたことはやりがいとなった。

今後もまだニーズが予想されることから、継続して開催をしていけるよう材料・道具・体制（サポートスタッフの確保含む）を整えていきたい。

この事業を開始に至ったきっかけは、熊本地震以降、熊本県西原村で開催されていた『西原村木もくプロジェクト』の「木もくひろば」である。被災後の住宅や仮設住宅での住環境改善、住まいを無くした住民のやりがい創出を目指し、女性２人が中心になって木工ものづくりを開催されていた。
その中でルールとされていたことの一つは「作ってあげない」。どんな形であっても必ず参

加者自身が手を動かし、暮らしの復興の一歩を自分でまた進んだことを感じてもらいたいという理由でもある。
武雄で開催するワークショップも『木もくひろば』としたのは、建築プロンティアネットで西原村のお手伝いをする中で、ここに共感したからである。西原村の皆さんが復興に向けて歩まれている道のりを武雄にもつなげながら、一方的なボランティアではない支援にしていきたい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

［木もくひろばで使用した板材提供団体等］
・令和元年度ふる郷の木づかいプロジェクト　流域森林・林業活性化部会
　　提案公募型森林・木づかい活動補助金
　　※武雄市杵島郡木材同業組合との共同事業により板材購入費の助成
・太良町森林組合より、太良産ヒノキ材の支援
・黒田木材商事株式会社より、佐賀県産スギ材の支援

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

［次年度事業予定項目］
●相談活動の継続（防災を見据えた生活環境改善へのアドバイス等）
●木もくひろばの継続
●新型コロナ感染防止対策を踏まえた避難所運営への建築的視点での取組
●記憶の中の住まいアルバム